

〔共同研究：インドネシアとの相互的文化交流に関する総合的研究（Ⅱ）〕

## 映画とインスタグラムが誘うスンバ

——インドネシア東部における観光の発展——

小 池 誠

### 1 はじめに

インドネシア東部に位置するスンバ島を対象にして筆者が社会人類学的な調査研究を始めたのは1985年からである。1980年代後半から1990年代において、スンバ島を訪れる観光客は、観光地として有名なバリ島に飽きて、さらに観光化されていない新天地を求めて来た欧米の観光客か、また日本人ならば戦争中にスンバ島に駐留していた元兵士や具象的な模様が描かれた絨織物（イカット）を求めて島々をめぐる織物愛好家など<sup>1)</sup>、それほど多くはなかった。また、一般のインドネシア人にとってスンバ島はその名前すらほとんど知られていなかった。たとえば筆者がジャカルタやバリでスンバ島の話インドネシア人にすると、多くの人がスンバワ島（西ヌサ・トゥンガラ州にある島）と混同していた<sup>2)</sup>。スンバ島に来るインドネシア人は、その多くが仕事が目的であった。ところが、2010年代以降、スンバ島を訪ねる国内観光客が急増している。2018年3月に東スンバに行った時も、スンバ独特の草原（サバナ）を背景に自撮りするインドネシアの女性観光客をたくさん見かけた。観光客向けのチャーター車の運転手によると、ワラキリなど夕焼けがきれいな定番の海岸に連れていくことがしばしばだという。インドネシアでも日本と同様に「インスタ映えする」名所に観光客が集まるようになってきている。インドネシア国内でスンバ島が観光地として知られるようになったきっかけの一つは、スンバ島がロケ地となった、インドネシアのアクション映画『黄金杖秘聞』の話題性であり、さらにヒット映画『電波が入りにくい』が大きく関係している。

本稿ではスンバ島で撮影されたインドネシア映画と観光客がインスタグラムなどSNSに投稿する写真によって、どのようにスンバ島にインドネシア人の注目が集まるようになり、その結果、どのようにスンバ島を対象とした観光が発展してきたのか明らかにしたい。スンバ島の観光開発を論じるためには、世界的な高級リゾートであるニヒ・スンバ（Nih

1) 田口は1990年代後半の東スンバ県における布売りや布ビジネスの詳細な人類学的調査の結果を報告している [田口 2002: 159-175]。

2) 映画『電波が入りにくい』に関するインドネシア人による記事でも、この点が指摘されている。  
<https://lifestyle.sindonews.com/read/1267834/158/ini-alasan-film-susah-sinyal-syuting-di-sumba-1513860597>（最終確認2020/03/29）

キーワード：現代インドネシア、スンバ、映画誘発型観光、インスタグラム

Sumba) があり、また毎年多くの観光客を集めるパソーラ (*pasola*) が行われる西部を取り上げるべきであるが、本稿はインドネシア映画と国内観光の関係を研究の象とするため、東スンバに焦点を当てる。構成は以下の通りである。2章ではまず本稿の研究上の位置づけを明確にした後、「映画誘発型観光」に関する先行研究を概観し、調査の方法についてまとめたい。3章ではスンバ島の社会・文化的な概況を説明した後、地方政府による統計資料などをもとにして観光客の増加を明示したい。4章では、スンバ島を舞台にした4作のインドネシア映画を取り上げ、その内容を紹介して、映画関係者がスンバの何に焦点を当てて、どのような映画を製作しているのか明らかにしたい。5章はスンバ島をメインにしたインドネシアの観光サイトや観光客によってインスタグラムに投稿された写真などを取り上げて、現代インドネシア社会でSNSがどのように観光に影響しているのかという問題を考察したい。

本稿は、2019年に公開された「映画に描かれた現代のインドネシア社会——旅行・グルメ・SNS」[小池 2019] の続編に当たる報告書である。最初の報告書では2016年から2019年3月までに日本の映画祭で上映されたインドネシア映画4作を対象にして、それぞれの映画が取り上げるインドネシアの観光地や、嗜好品も含めた食文化に焦点を当てた。日本と違うインドネシア社会の独自性や異質性ではなく、映画というマスメディアだけでなくSNSが大きな影響を与えるようになったことを示して、私たちが生きる日本社会との同時代性・共通性を明らかにした。この点は、映画とスンバ観光に焦点を当てた本稿とも共通するテーマである。ともに2016～2018年度の地域社会連携研究プロジェクト「インドネシアとの相互的文化交流に関する総合的研究(Ⅱ)」による調査研究の一環として書かれた論文であり、日本とインドネシアとの文化交流を促進する上で重要な問題点を論じている。

## 2 映画誘発型観光に関するスンバ調査

本稿は二つの面をもっている。一つは1980年代から今日まで筆者が続けて来たスンバ島を対象としてきた社会人類学的調査研究<sup>3)</sup>の現代版といえる側面である。これまでインドネシアの他の地方とは異なるスンバ独自の文化と社会の仕組みとして、父系氏族 (*kabihu*)・家 (*uma*) という親族と一般交換にもとづく婚姻体系、そしてマラプ (*marapu*, 「祖先, 祖霊」の意味) に対する信仰を核とした儀礼に焦点を当てた論考をいくつも発表してきた<sup>4)</sup>。親族と儀礼に関する研究は今日でも重要であるが、多様なメディアが発達し、また移動性が1980年代とは比べられないくらい高まった現代インドネシア社会において、スンバ島で暮らす人々が直面する社会変化を対象とした研究も忘れてはいけないものであり、本稿は現代のスンバ社会における観光化の問題を取り上げている。

もう一つの側面は、小池 [2019] と同様にメディア人類学と呼ぶことができるような分野

3) 最初の調査は、1985～1988年に東スンバ県の中核村ウンガ (当時の行政単位ではハハル分郡ウンガ村に位置する) で親族 (「家」) と儀礼に焦点を当てて実施した。

4) その代表的なものは博士論文を公開した『東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼』[小池 2005] と拙著 [小池 1989, 1990, 2012, 2013a, 2013b, 2017, Koike 2019] などである。

の研究である。筆者はこれまで映画を中心にインドネシアのメディアに関する研究も続けてきた<sup>5)</sup>。スンバを対象とした社会人類学的調査とメディア研究の双方に関わるのが、スンバで撮影されたインドネシア映画『黄金杖秘聞 (Pendekar Tongkat Emas)』(4章参照)を取り上げた小池 [2016] と本稿である。両者の大きな違いは、「はじめに」で述べたように本稿は映画がどのように観光に影響するかを論じている点である。これまで筆者はスンバの観光について論じたことがないので<sup>6)</sup>、つづいて映画と観光に関する研究動向を簡単に紹介したい。

1990年代に入って「映画誘発型観光」(film-induced tourism)<sup>7)</sup>という概念を使って、映画やテレビ番組などのメディアの影響で、その舞台となった地域やロケ地に観光客が集まる現象が観光研究の対象となってきた [Beeton 2016, 鈴木 2009]。もちろん本稿もその一環に位置付けることができる。日本の場合は、アニメの舞台と目された地域をファンが訪れる「聖地巡礼」が話題となっているが、これも「映画誘発型観光」の一つである<sup>8)</sup>。ビートンが書いた『映画誘発型観光』[Beeton 2016]<sup>9)</sup>は、この分野に関する包括的な概論書になっている。ビートンは狭義の映画だけでなく、テレビ番組やDVDなども考察の対象に含め、さらにロケ地が観光地になる (On-Location) 現象だけでなく、USJのような映画に関係するテーマパークへの観光 (Off-Location) も研究の対象に含めている [Beeton 2016: 9-13]。また、マネジメント系の観光研究では、映画などによる経済的な効果 (benefits) のみを考察しているが、ビートンは効果だけでなく環境破壊など観光化の負の側面 (drawbacks) も論じていることは注目に値する [Beeton 2016: 37-40]。ただし、筆者は現代の映画と観光の関係を考える上で、映画とロケ地に関連するブログや観光客がSNSに発信するコメントと写真などの役割が大きいと考えているが、その点についてビートンは日本の研究者の説を紹介するだけで [Beeton 2016: 108]、まったく掘り下げていない。

本稿は上にのべたような意味で「映画誘発型観光」の研究に含まれるものであるが、スンバ島における観光それ自体を系統的に調査しているわけではない。観光客を案内する運転手などスンバの観光関係者への聞き取り調査を行い、観光地での参与観察を実施しているが<sup>10)</sup>、

5) メディア人類学の分野では、『インドネシア——島々に織りこまれた歴史と文化』[小池 1998]のなかでインドネシアのポピュラーカルチャーを取り上げ、また小池 [2016, 2018] ではインドネシア映画に焦点を当てている。

6) スンバ島における観光を論じた研究論文はほとんど存在しないと思われる。例外なのは Hoskins [2002] であるが、観光そのものではなく、西スンバのコディの住民が抱く欧米観光客のイメージの問題を取り上げている。

7) 鈴木 [2009] は、映画ではなく、より幅広く「メディア誘発型観光」(media-induced tourism) という用語を使用し、その研究動向を紹介している。

8) ビートンは日本のアニメに関連する「コンテンツ・ツーリズム」(contents tourism) にも言及している [Beeton 2016: 31-33]。

9) 筆者が使用したのは、2016年発行の *Film-induced Tourism* の第二版である。初版は2005年に出版された。第二版では初版出版以降の研究動向もカバーされていて役に立つ。

10) 本稿で用いている資料の一部は、地域社会連携研究プロジェクト (16連254) の研究費によって2018年3月9日から13日にかけて東スンバ県で実施した調査で得られたものである。

観光客を対象とした聞き取り調査はまだ行っていない。そのため、このテーマをもっと掘り下げるためには、より本格的なスンバ調査が必要となる。

### 3 スンバ島と観光

#### (1) スンバ島の概況

スンバ島は、インドネシア東部を東西に広がる小スンダ列島の中の一つの島で、バリ島とティモール島のほぼ中間に位置する。スンバ島は行政上、東ヌサ・トゥンガラ州に属し、東スンバ県、中部スンバ県、西スンバ県、南西スンバ県という4つの県に分かれる。東スンバ県を除く3県は元は西スンバ県であったが、2007年に分割された。島の面積は11,311km<sup>2</sup>（四国の約5分の3）で、1km<sup>2</sup>当たりの人口密度が70.17人と低く、島全体の総人口はわずかに約79万人（2018年）である [Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur 2019: 91]。なお2015年のデータ<sup>11)</sup>でみると、インドネシア全体の人口密度が134人で、東ヌサ・トゥンガラ州は105人になっているので、いかにスンバ島の人口密度が低いか明らかである。

このような人口密度の低さは、スンバ島の自然環境に起因している。島全体がサバナ気候に属し、インドネシアのなかでも乾燥した地域として知られている。とくに東スンバ県はオーストラリアから吹いてくる乾いたモンスーンの影響を受け、4月から9月頃にかけての乾季はほとんど雨が降らず、非常に乾燥している。とくに東スンバ県の北海岸部は、まさにサバナ気候の典型で、丘陵地帯がうねり、木々が生えていない草原（サバナ）が一面に広がっている。このようにインドネシアのなかでも珍しいスンバ島独特の景観が、国内観光客を引きつける大きな魅力となっている。乾季に上空を飛んでいると、川沿いに樹木が茂っているだけで、まさに赤茶けた荒涼とした風景しか目に入ってこない。とはいえ、雨季に入ると、それが青々とした草原に変貌するのである。ところが、同じ県内でも内陸部に入ると、スンバ島のなかでも比較的雨量が多く、木々が生い茂った山地が存在する。スンバ島の土壌はおもに石灰岩質のため、農業には適さない。東スンバにおいて水田は一部にみられるだけで、生業の中心はトウモロコシや、イモ類、豆類の栽培である。いっぽう比較的雨量の多いスンバ島西部では水田耕作もひろく行われている。東西スンバともに草原を利用した家畜飼養が盛んで、馬のほか水牛・牛・豚・鶏などの家畜が飼育されている。

このように低い農業の生産性と、農業以外のセクターがほぼ存在しないため、スンバ島はインドネシアのなかでも貧困が大きな問題となっている。2019年にインドネシア統計局が出した統計書にもとづき貧困率<sup>12)</sup>をみていこう [Badan Pusat Statistik 2019: 9-24]。東ヌサ・トゥンガラ州の貧困率は21.09%であり、これは全34州のなかで三番目に高い数字である。全国で貧困率をもっとも高いのがパプア州の27.53%で、観光地として有名なバリ州はわず

11) <https://www.bps.go.id/linkTableDinamis/view/id/842>（最終確認2020/03/20）

12) 各地域ごとに算出された貧困線（最低限の生活を送る上で必要となる一人当たりの月額）以下の人口の割合。東ヌサ・トゥンガラ州の貧困線は Rp 373,922（約2900円）である。

か3.79%である。スンバ島の県レベルでみると、東スンバ県の貧困率は30.02%に達し、これは中部スンバ県に次ぐ高さである。貧困率の高さは、教育水準の低さに繋がっている。13～15歳（中学段階）の就学率<sup>13)</sup>はバリ州が100%であるのに対して、東ヌサ・トゥンガラ州は93.71%しかない。さらに東スンバ県の就学率は州全体よりも低く、90.45%である〔Badan Pusat Statistik 2019: 57-58〕。この数字は親の収入が十分でないため、中学校を退学せざるをえない生徒がいることを示している。

このように経済的には貧しいスンバ人<sup>14)</sup>はインドネシアの多数派であるジャワ人とはまったく異なる文化をもっている。その特徴の一つがマラブ (*marapu*) に対する信仰である。国家公認の宗教 (*agama*)<sup>15)</sup> であるイスラームやキリスト教に対して、スンバ人はスンバ独自の信仰をインドネシア語で「マラブ教 (*Agama Marapu*)」と呼んでいる。マラブは多義的な言葉であるが、一般に「祖先、祖霊」の意味で用いられる。インドネシア全体でスンバ島のように地域固有の宗教が現在まで存続している地域はほとんどない。とはいえ、スンバ全体で、「近代化」の具体的な現われとしてキリスト教に改宗するスンバ人が年々増加している。キリスト教に改宗するスンバ人が増加し、文化は急激に変化しているとはいえ、マラブに対する儀礼が執行される独特なとんがり屋根をもった慣習家屋、「マラブの家 (*uma marapu*)」と、家屋の前には建てられた支石墓 (ドルメン)、さらに具象的な模様が描かれた緋織物は、今日でもスンバ島のあちこちで見ることができ、スンバラしさを構築する重要な要素として国内外の観光客を引きつけている。

## (2) スンバ観光の発展

スンバ島観光の全体像を明らかにするのが本稿の目的ではないので、西部に関する言及は必要最小限にとどめたい。まず国内外から多くの観光客を集める、スンバ最大のイベントは西スンバ県と南西スンバ県のいくつかの地域で開催されるパソーラ (*pasola*) である。これは人々の耳目を集める派手な騎馬戦の部分と、特定の時期にだけ出現するゴカイ類 (*nyale*) の生殖群泳に関係する儀礼から成っている〔古澤 2017〕。地方政府による観光プロモーションという側面と、在来暦法に従いパソーラを行おうとする祭司との関係〔古澤 2017: 30-31〕は、観光人類学の立場から興味深いトピックである。

観光客がスンバ島を訪れるための入口は、東スンバ県の県都ワインガブにある空港 (Bandar Udara Umu Meheng Kunda) と、南西スンバ県のタンボラカにある空港 (Bandar Udara Tambolaka) の二つである。2000年代に入るまではワインガブが主要空港であったが、その後タンボラカ空港の拡張工事後の結果、より大型の飛行機が離着陸できるようになり、今日ではバリ島などから訪れる観光客はタンボラカ空港を利用するほうが増えている。

13) インドネシアは日本と同様に中学校までが義務教育である。

14) スンバ人 (スンバ語で *tau Humba*) は、スンバ島の圧倒的な多数派民族である。スンバ島には、スンバ人以外に周辺のサブ島などから渡って来た住民も居住している。

15) 建国五原則パンチャシラ (*Pancasila*) の一つに、唯一神 (*Tuhan*) への信仰が掲げられている。

西スンバ島の南海岸にはリゾートホテルとして世界的に有名になったニヒ・スンバ (Nihis Sumba) がある。もともと観光客がいない自分たちだけのサーフ・スポットを求めて旅をしていたサーファーの夫婦 (Claude and Petra Graves) が1988年にこの美しい海岸を「発見」し、後にアメリカ人の実業家の資本参加によって、現在のような高級リゾートが完成した。観光誌 *Travel+Leisure* で2016年と2017年に「世界一のホテル」という評価を受けている<sup>16)</sup>。最低ランクの部屋でも1泊895ドル (2020~2021年室料一覧)<sup>17)</sup> もする高級ホテルであり、当然、宿泊客層は限られている。

エクスペディアを使ってスンバでホテルを検索すると、西スンバで7ホテル、東スンバで6ホテルが出てくる<sup>18)</sup>。そのなかで最高ランクは上記のニヒ・スンバであり、もっとも宿泊料の安いのはタンボラカにある1泊1854円のホテルであった。それぞれの立地をみると、西スンバ島の県都ワイカブバックとタンボラカ、ワノカカにあるホテルおよび東スンバ島の県都ワインガブにあるホテルを除いて、その他9のホテルはすべて海岸に面した「ビーチ・ホテル」である。ビーチ・ホテルがそれぞれ開業した年は明らかでないが、そのほとんどが2010年代後半にオープンしたホテルであることは確実である。1980年代以降、筆者が知っているホテルはワインガブとワイカブバック市内の交通が便利な所にある、おもにインドネシア人の出張者と外国人観光客が利用するホテルであり (表1で示されているのはこの種のホテル)、以前から営業しているこれらのホテルはエクスペディアには登録されていない。このように2015年以降スンバ島のホテル事情とその宿泊客の層が大きく変化したことは明らかである。

最近のスンバ島、とくに東スンバ島の観光の発展を明らかにするために、地方政府の出した統計資料を調べてみよう。最初に東スンバ島のホテルとその宿泊者数に関する統計を紹介する。入手可能な1995年から2015年まで5年ごとのデータを示している (表1参照)。2015年には客室数は増えているが、ホテルの数はほぼ変化がないことが分かる。2015年まではすべてワインガブ市内にあるホテルである。顕著な変化は、国内外ともに宿泊者数が1995年から2005年にかけて減少し、その後、増加に転じていることである。後述するように、2000年代に入ってインドネシア全体の国内観光について落ち込みは認められないので、東スンバ島の宿泊者数のデータがなぜM型になっているのか、その理由は不明である<sup>19)</sup>。ただし、東スンバ県政府の公式サイトが発表している観光客数の推移は外国人観光客も国内観光客もと

16) <https://nihi.com/nihi-sumba/about-our-story/>; [https://www.huffpost.com/entry/the-surfer-who-became-a-h\\_b\\_919337](https://www.huffpost.com/entry/the-surfer-who-became-a-h_b_919337) (最終確認2020/03/21)

17) <http://luanallc.com/nihi.html> (最終確認2020/03/21)

18) <https://www.expedia.co.jp/Hotel-Search?adults=1&destination=Sumba%2C%20East%20Nusa%20Tenggara%2C%20Indonesia&endDate=2020-04-17&latLong=-9.764014%2C119.962644&localDateFormat=yyyy%2FM%2Fd&regionId=6055727&semctl=&sort=RECOMMENDED&startDate=2020-04-12&theme=&useRewards=true&userIntent> (最終確認2020/03/21)

19) インドネシアの中央政府や地方政府が出している統計データの信頼性を疑う研究者も多いので、データの誤りという可能性も否定できない。

表1 東スンバ県におけるホテルと宿泊者数

	ホテル数	客室数	外国人 宿泊者 (人)	2005年を 100とした指数	国内 宿泊者 (人)	1995年を 100とした指数
1995	8	122	2,102	879	4,102	125
2000	8	99	663	277	3,739	114
2005	7	117	239	100	3,290	100
2010	7	128	360	151	6,055	184
2015	8	199	600	251	10,908	332

[Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2007: 57; Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2017: 59]

もに2012年から毎年2017年まで毎年増加していることを示している（表2参照）。なお、インドネシアの統計で使用される「観光客」(wisatawan)は、世界観光機関(WTO)の定義に従い、いわゆる「観光」だけでなくビジネスを目的とした旅行者も含んでいる。アクセス可能な統計書が限られているため<sup>20)</sup>、詳細は不確実な部分はあるが、大きくみて2005年と比べると、2015年は外国人とインドネシア人の双方で東スンバ県を訪れる人は増えているし、その伸び率は外国人と比べてインドネシア人のほうが大きいことは確実である。さらに、すでに紹介したビーチ沿いのホテルの増加を考えると、2017年以降も観光客数は大きく増加していると考えられる。

表2 東スンバ県における観光客数の推移(2012~2017年)<sup>21)</sup>

	外国人 観光客(人)	前年比	国内 観光客(人)	前年比
2012	1,500		8,000	
2013	1,764	118%	12,500	156%
2014	2,206	125%	24,515	196%
2015	2,951	134%	26,324	107%
2016	3,212	109%	28,406	108%
2017	3,895	121%	29,462	104%

インドネシア全体の国内旅行の推移は、観光省が公刊しているデータによると2001年から2005年がほぼ横ばいで、2006年から増加傾向が顕著になっている。「国内観光客旅行回数」(jumlah perjalanan wisatawan nusantara)をみると2001年の1億9577万回から2017年の2億7082万回、つまり17年間で1.4倍に増加し、旅行関連の「総支出」(total pengeluaran)で見ると4.3倍に増えている[Beta Septi Iryani & Kartika Yulistiyawati 2014: 18; Barudin et al. 2017: 54]。2017年の観光省の報告書は、国内観光が発展した要因として、インドネシア経済の成長と、治安の安定、地方への交通アクセスの改善、さらに情報テクノロジーの進歩を

20) この報告書を書くために使っている統計データは、すべて中央政府・州政府・県政府の統計局の公式サイトからダウンロードしたものである。

21) [sumbatimurkab.go.id/obyek-wisata/](http://sumbatimurkab.go.id/obyek-wisata/) (最終確認2020/03/23)

挙げている [Barudin et al. 2017: 54]。この情報テクノロジーの進歩は、後に取り上げるように SNS の普及によって旅行先の情報が簡単に入手できるようになったことを指している。

外国人観光客数よりもインドネシア人観光客の伸び率が高いというのは東スンバ県だけの現象であるのかを検証するために、つぎに東ヌサ・トゥンガラ州の統計データを調べてみよう (表3参照)。州内で世界的な観光地となっているのは、コモドドラゴンで有名なコモド島に隣接するフローレス島西部のラブアン・バジヨ<sup>22)</sup>である。日本からもツアーが組まれている。入手できた2005年と2015年の観光客数を比べてみると、外国人観光客については東スンバ県も東ヌサ・トゥンガラ州もほぼ2.5倍になっているのに対して、インドネシア人観光客については、州全体で2.6倍なのに東スンバ県では3.3倍に増加していて、東スンバ県のほうがインドネシア人観光客の伸び率がすこし高いことが明らかになった。この要因の一つとして考えられるのが、次章で取り上げるスンバ島で撮影されたインドネシア映画である。

表3 東ヌサ・トゥンガラ州の観光客数の推移 (2005~2018年)<sup>23)</sup>

	外国人 観光客 (人)	2005年を 100とした指数	国内 観光客 (人)	2005年を 100とした指数
2005	26,101	100	142,881	100
2010	80,075	307	498,924	349
2015	66,860	256	374,456	262
2018	128,241	491	1,111,191	778

2018年のみ暫定値 [Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur 2007: 320; Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur 2015: 291; Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur 2019: 415]

#### 4 スンバを描いたインドネシア映画

これまでスンバで撮影された長編映画は5本ある。初めてスンバ島で撮影された長編映画は、ガリン・ヌグロホ監督 (Garin Nugroho) の『天使への手紙 (Surat untuk Bidadari)』(1994年封切り)である [小池 1998: 166-171; 2016: 42]。この作品でガリン・ヌグロホ監督の世界的な評価は高まったが、ロケ地のスンバ島自体が有名になったわけではない。インドネシア国内でスンバ島の名前が知られるようになったきっかけは『黄金杖秘聞』である。

##### (1) 『黄金杖秘聞』

『黄金杖秘聞 (Pendekar Tongkat Emas)』はインドネシアの伝統的な武術であるシラット (silat) を全面的に使ったアクション映画 (film laga) である<sup>24)</sup>。インドネシア語のタイトル

22) 観光省が出した2017年の国内旅行に関する報告書でも、ラブアン・バジヨはボロブドゥール遺跡とともにインドネシアを代表する10の観光地に選ばれている [Barudin et al. 2017: 44]。

23) 2005年のデータは、ホテルの宿泊者数であり、それ以外の年は「観光客」の数である。なお、2018年のみ暫定値である。このようにインドネシアの統計は、年によって掲載される項目が異なることが多いので、経年比較が難しくなっている。

を直訳すると「黄金杖 (tongkat emas) の勇士」になる。監督はイファ・イスファンシャ (Ifa Isfansyah) が務めた。プロデューサーの一人、ミラ・レスmanaが小さい時から大好きだったシラット物コミックの映画化とも言える作品になっている。シラットの師匠チュンパカ (Cempaka) がもっていた、不思議な力を秘めた黄金杖をめぐる弟子同士の闘いがメイン・テーマとなっている。ベテラン女優クリスティン・ハキム (Christine Hakim) や、多くのインドネシア映画で主演を演じるレザ・ラハディアン (Reza Rahadian) とニコラス・サプトラ (Nicholas Saputra) など、現代のインドネシアを代表する映画俳優が多数出演している娯楽映画である。

『天使への手紙』と同様に東スンバ県で撮影されているが、『黄金杖秘聞』は現実のスンバ社会と文化を描いているのではない。現実のスンバ島ではなく、「とある国 (Negeri antah berantah)」を舞台として、スンバとはまったく縁もゆかりもないシラットの闘いが展開する。この点について、2015年にアジアフォーカス・福岡国際映画祭の一環として開かれたパネルでミラ・レスmanaは「特定の場所ではないことを表現するためにスンバを借りたとも言えます。ただし、私たちが準備のためにスンバと行き来するなかで、スンバの文化や状況、スンバにあるものから影響を受けずにはいられないということも感じました。スンバ的なものをなるべく使わずにと思っていたのですが、結局はスンバにある布のモチーフを使ったり (以下略)」「山本・篠崎編著 2016: 65] と語っている。彼女の言葉通り、スンバ独特の絛織<sup>25)</sup>や太鼓などスンバ的なアイテムが映画のいくつかの場面で使われている。虹の翼 (Sayap Merah) という武術グループの師範が住む建物は、スンバ独特の具象的な模様が鮮やかに織りこまれた布で飾られているし、また黄金杖そのものもスンバの布に包まれている。

ミラ・レスmanaとリリ・リザがスンバ島を撮影地に選んだ第一の理由はスンバの多様な景観の魅力であった。ミラ・レスmanaによると、「スンバを最初に訪れたのは、『ティモール島アタンブア39°C』<sup>26)</sup> という映画を作るために西ティモールのアタンブアに行った帰りです。森があって、川があって、サバンナがあって、丘があって、場所が特定されないシラットの映画を作るのに適していると思いました。もちろん費用がかかりますし、遠いですし、たいへんなこともあります。それでもそこを選びたいと思いました」[山本・篠崎編著 2016: 64]。この言葉に表されているように、『黄金杖秘聞』では乾燥した海岸部の草原と、内陸部の比較的湿潤で緑の多い景観の違いが映画のストーリーの展開にうまく活かされている。シラットの闘いはおもに乾燥し、石灰岩だらけの草原で撮影されている。一方、ヒロインのダラを助けた男性エランが住む村は、水に恵まれた環境にあり、女性が布を織り、落ち着いた雰囲気である。この平和な村の場面は、東スンバ県の内陸部で撮影された。荒涼とし乾燥しきった草原だけでなく、木々に囲まれた水辺の静かな地域も、ストーリーに合わせて巧みに

24) 『黄金杖秘聞』については、すでに小池 [2016] で詳細に論じている。

25) 後帯機という原初的な織機を使って織る、絛絛 (絛糸のみを括りて染め分ける) である。

26) 製作ミラ・レスmana、監督リリ・リザで2012年製作。西ティモールのアタンブアを舞台に東ティモール難民の家族を描いた映画。

映画で使われているのが、『黄金杖秘聞』の特徴である。

『黄金杖秘聞』は製作に250億ルピア近く（約2億5000万円）を費やしたという<sup>27)</sup>。スンバでの撮影に3か月も要したことが、これだけの製作費の要因である。しかしながら、製作者の期待に反して2014年12月18日の封切りから翌年1月4日までの観客数は235,112人であった<sup>28)</sup>。同時期に封切られたインドネシア映画には、この倍以上の観客を集めたコメディ映画（*Merry Riana: Mimpi Sejuta Dolar*）もあり、興行的には失敗といえる。とはいえ、スンバ島で撮影された最初の一般向け映画がスンバの知名度を上げるのに寄与したことは確実である。

## （2）『マルリナの明日』

この映画の原題は *Martina si Pembunuh dalam Empat Babak* で、直訳すると「4幕仕立ての殺人者マルリナ」となり、題目通り4幕構成の映画である。インドネシアでは2017年11月に封切られた。この映画はもともとガリン・ヌグロホ監督のアイデアから製作が始まった映画であり、暴力性の濃い作品に仕上がっている。すでに紹介した映画とは違って、現実のスンバを舞台にしているということを表面に出している。ヒロインのマルリナが訴え出た警察署の看板には「スンバ県」（KAB SUMBA）と書かれてあった。スンバ県は実在しない県名であり、ぼやかしているとはいえ、スンバそのものを描いている。

「第一幕：強盗団」<sup>29)</sup>では、まさに東スンバラしい高台にポツンと建っている家が映しだされ、一人暮らしをしているマルリナが強盗団に襲われる。家畜を盗まれ、マルリナが強盗団のボスにレイプされるが、最後は刀で彼の首を切り落とす。「第二幕：旅」では、その首を持ってマルリナは遠方にある警察に出頭しようとする。途中、婚資の馬を載せ、甥の結婚式に参加しようという女性が乗ったトラックにマルリナは便乗する。そのトラックが強盗団の一人に襲われ、マルリナは馬に乗って警察署に向かう。東スンバラしい乾燥した風景のなかでマルリナが馬に乗っている場面は、映画のポスターに使用されるくらい印象的である。「第三幕：自首」ではマルリナは警察に出頭するが、警察官は形式主義的な対応に終始し、何も解決しない。「第四幕：出産」では、旅の途中出会ったノヴィがマルリナの家で出産する。マルリナはレイプしようとした強盗団の一人を首を切って殺し、きれいな朝焼けのなか、マルリナと赤ちゃんを抱えたノヴィがバイクで出発していく場面で映画は終わる。

困難を乗り越え、自分で道を切りひらいて行く女性の強さを描いた映画と、簡潔にストーリーをまとめることができる。このように一般化できる筋立てのなかに、スンバ的なアイテ

27) <https://www.suara.com/wawancara/2014/12/15/100000/mira-lesmana-jumlah-penonton-bukan-ukuran-sukses-sebuah-film>（最終確認2020/03/26）なお、この製作費はインドネシア映画としてはかなりの高額である。

28) <https://www.tabloidbintang.com/extra/lensa/read/16709/jalan-panjang-menuju-1-juta-penonton> 2020/03/26（最終確認2020/03/26）

29) 映画の粗筋をまとめる上で公式パンフレット [パンドラ編 2019] を参考にしている。

ムがいろいろな形で織り込まれている点が、この映画の特徴である。この映画に登場するのは、乾燥し、荒涼としたスンバの風景であり、その高台に建っている一軒家である。最初に観客を驚かすのは、家の居間に置かれた、布でくるまれたマルリナの夫の遺体であろう。確かにスンバでは、葬儀の準備が整うまでの間（場合によっては何年も）、遺体を安置しておく慣習がある。監督のモーリー・スリヤ（Mouly Surya）自身が監督インタビューのなかで、「スンバ島では実際に死体をミイラ化させる風習があります。（中略）ある家庭では、棺に入れた遺体を30年間も家に置いていました」と述べている [パンドラ編 2019]。この説明自体は間違いとはいえないが、遺体が安置されるのは、原則として儀礼の空間となるような慣習家屋であり、映画に登場するような住居内の日常的に飲食をする空間のなかに遺体が置かれていることはない。

この映画の中心をなすのは、強盗団が一人住まいの女性を襲って、家畜を盗み、さらに女性をレイプするという展開である。監督はスンバについて次のように語っている。「インドネシアでも最も貧しい地区の一つでもあります。現代社会では起こりえないことが、今でも起こっているような場所なのです。人々は武器としてサーベルを持ち歩き、田舎では強盗のグループが家を襲うことだってあります。しかし、とても美しい自然があり、何世紀にもわたって形成された文化と信仰を持つ場所でもあります」 [パンドラ編 2019]。これも事実誤認とはいえないが、誤解を与える説明である。じっさいに民族衣装を着たスンバの男性が刀を腰に差しているのは村落部ではよく見かけることである。ただし、刀が武器として使われる状況も起こるかもしれないが、この刀自体は農作業やその他の日常の作業で普通に使用される道具なのである。原案を書いたガリン・ヌグロホは、市場で人が首を切り落とされて殺された実話にもとづいていると語っている<sup>30)</sup>。このような殺人事件がスンバ島のどこかで実際に起きたことは十分にありうるが、殺人事件自体はインドネシアの他の地方でも起きていることである。このようにスンバを暴力性と豊かな文化の両面を有した社会と描くのは、ガリン・ヌグロホの『天使への手紙』にも共通する、中央の映像作家によるスンバ表象である。以前、パプアの民族を取り上げた映画『パプアで行方不明 (Lost in Papua)』(2011年)についてコラムで「インドネシアでは中央の視線から『地方』を『未開』や『神秘的』という図式で描き出す国内オリエンタリズムと呼べるような映画が作られてきた。インドネシアの『地方』が商品化の対象となっている」 [小池 2018: 160] と批判的に書いた。『マルリナの明日』は『パプアで行方不明』ほど鮮明ではないが、やはり「国内オリエンタリズム」の系譜に入る映画といえる。撮影クルーがスンバで取材した結果にもとづいて、スンバ特有の事柄をいくつも映画のなかに取り入れてはいるが、どれもきわめて表層的で、奇妙な描写になっている。

『マルリナの明日』は、2018年12月のインドネシア映画祭 (FFI=Festival Film Indonesia)

30) <https://www.liputan6.com/showbiz/read/3804769/3-cerita-di-balik-syuting-film-marlina-si-pembunuh-dalam-empat-babak> (最終確認2020/03/27)

で最優秀作品賞や最優秀監督賞など多くの賞を獲得しているが、興行的には失敗だった<sup>31)</sup>。この映画で特記すべきことは、海外で高い評価を得たことである。2017年のカンヌ国際映画祭に正式出品し、さらに東京フィルメックスでは最優秀作品賞を受賞し、この他、世界中の映画祭で上映されている。その結果、日本を含めて多くの国で一般上映された<sup>32)</sup>。インドネシア映画が映画祭以外で日本で上映されるのは、ミラ・レスマナとリリ・リザがプロデューサーを務めた『ビューティフル・デイズ (*Ada Apa dengan Cinta*)』を例外として、きわめて珍しいことである。日本の宣伝用チラシには、「全く新しい『闘うヒロイン』に喝采!!! インドネシアの荒野から放つ超痛快“ナシゴレン・ウェスタン”」という宣伝文句が書かれていた。スンバ独特の景観も関係し、1960年代から1970年代に日本でも人気になったイタリア製のマカロニウェスタンになぞられて、「ナシゴレン・ウェスタン (インドネシア流西部劇)」が宣伝文句になっている。

このように『マルリナの明日』はインドネシア国内よりも海外で評判になった映画であり、スンバ島における国内観光の発展にはあまり関係していない。

### (3) 『電波が入りにくい (*Susah Sinyal*)』

これまで取り上げた3作品とはまったく違い、『電波が入りにくい』<sup>33)</sup>はジャカルタの人間から見た観光地としての東スンバが描かれている。2017年12月に全国の映画館で封切られた。エルネスト・プラカサ (Ernest Prakasa)<sup>34)</sup>は監督だけでなく、脚本執筆にも参加し、さらにヒロインのエレンの同僚イワンの役で出演している。この映画は、コメディの要素を織り込んだ、シングルマザーのエレンと17歳の一人娘キアラとの親子関係の変化を描いたドラマである。主人公二人のスンバ旅行を中心に粗筋を紹介したい<sup>35)</sup>。エレンはジャカルタの弁護士で、娘の面倒を自分の母に任せている。キアラはスマートフォンばかりいじっている娘で、仕事に忙しい母親に反抗的だった。祖母の死後、キアラはスマートフォンでたまたま「スンバで休暇中のアンディンの写真 (*Foto liburan Andien di Sumba*)」<sup>36)</sup>を見つけ、母親に電話してスンバ旅行に誘う。事務所でそれを聞いたイワンは「スンバ」を「スンダ」<sup>37)</sup>と勘違いする。二人がスンバの空港に着くと、題名になっているように「電波が入りにくい」ことに

31) [https://www.brilio.net/film/m\) arlina-9-film-ini-raih-piala-citra-tapi-kurang-laku-di-pasaran-181212v.html#](https://www.brilio.net/film/m) arlina-9-film-ini-raih-piala-citra-tapi-kurang-laku-di-pasaran-181212v.html#) (最終確認2020/03/27)

32) 筆者は大阪市内のシネ・ヌーヴォで2019年6月30日に『マルリナの明日』を観た。日曜日の昼間の上映で、観客は20名ほどだった。

33) 小池 [2019] では『携帯が繋がらないうらい』と訳したが、より原題に近い訳に変えた。

34) 華人系インドネシア人のお笑い芸人で、いくつもの映画に出演した後、『隣の店をチェックしろ (*Cek Toko Sebelah*)』で監督と主演を務めている。

35) 日本の映画祭では上映されてなく、まだ『電波が入りにくい』を観ていない。そのため脚本をもとにした小説 [Ika Natassa & Ernest Prakasa 2018] をもとにして、YouTubeにアップされている予告編や映画関係の動画 (BEHIND THE SCENES) も参考にしながら、この映画の内容を紹介している。

36) アンディン (Andien Aisyah) はインドネシアの女性歌手で、何度もスンバに行き、その時の写真をインスタグラムに投稿したり、動画をYouTubeにアップしている。

37) スンダ (Sunda) は西ジャワ州の多数派の民族。

困る。二人は予約したホテル、フンバ・サンライズ (Humba Sunrise)<sup>38)</sup> の自動車に乗って石だらけの悪路を通して、美しい海岸沿いのホテルに到着する。ホテルのオーナーや従業員、宿泊客との交流のなかで、最初はぎこちなかった二人は少しずつ互いの心を開いて話ができるようになっていく。ジャカルタとはまったく違う、スンバのきれいな景観やのんびりした雰囲気の中で、スマートフォンを気にしてジャカルタのことばかり考えていた二人はしだいに変わっていく。ジャカルタに戻った後、エレンは仕事に追われたあまり、キアラとの約束を忘れ、怒った娘は一人でスンバに行ってしまう。エレンは追いかけて、スンバのホテルで二人は和解する。

この映画は観光地としてのスンバを肯定的に描いていても、やはり国内オリエンタリズムといえる表象が認められる。まず題名に表れているように、当たり前のように4Gが使える、インスタグラムやWhatsAppを使って知り合いと簡単にコミュニケーションはできるジャカルタと、使用可能な電気通信事業者が限られ、場所によっては電波状態が極めて悪いスンバ<sup>39)</sup>をたしょう誇張して対比させ、その結果、人間関係が希薄になりがちなジャカルタに対して、豊かな対面的コミュニケーションが築きやすいスンバを肯定的に描いている。より一般的に表現すれば、物質的な豊かさにあふれたジャカルタと不便だが精神的な落ち着きが得られるスンバとを対照させている。そのため、エレンとキアラが泊まるホテルは、空港があるワインガブから自動車でも2時間もかかる僻地にあり、半日しか電気が使えず、Wi-Fiも故障中という設定にしている。もちろん、このような立地条件にあるホテルは東スンバ県には存在せず、「僻地」としてのスンバを強調するための設定である。

エルネスト・プラカサがインスタグラムに投稿した情報によると<sup>40)</sup>、この映画は200万人の観客を動員したヒット映画である。また、インドネシア語版ウィキペディアのインドネシア映画の観客動員ランキングによると<sup>41)</sup>、217万人の観客数で歴代27位に入っている。この観客数は多額の製作費を使った『黄金杖秘聞』をはるかに上回っている。とうぜん、この映画がスンバ観光に与えた影響は大きい。この映画のロケ地を説明するブログがいくつかある(5章参照)。映画を観た人は、このような観光サイトの記事を参考にして、じっさいにスンバに観光に行くようになる。

38) インドネシア語の Sumba は東スンバのカンベラ語などでは Humba になる。つぎに取り上げる『フンバ・ドリーム』も同じである。

39) この点をエルネスト・プラカサはスンバをロケ地として選んだ理由に挙げている。https://lifestyle.sindonews.com/read/1267834/158/ini-alasan-film-susah-sinyal-syuting-di-sumba-1513860597 (最終確認2020/03/29)

40) https://www.liputan6.com/showbiz/read/3221844/susah-sinyal-raih-2-juta-penonton-ernest-prakasa-dipuji (最終確認2020/03/27)

41) https://id.wikipedia.org/wiki/Daftar\_film\_Indonesia\_terlaris\_sepanjang\_masa (最終確認2020/03/27) ちなみに、このランキングによると、プロデューサーがミラ・レスmanaで、監督がリリ・リザの大ヒット映画『虹の兵士たち (Laskar Pelangi)』は472万人の観客動員で歴代4位に入っている。

(4) 『フンバ・ドリーム (*Humba Dreams*)』

2019年6月にプレミア上映された<sup>42)</sup>、プロデューサーのミラ・レスマナと監督のリリ・リザが製作したアート系の映画である。日本では2019年9月にアジアフォーカス・福岡国際映画祭の「東南アジア・リージョナル特集」で上映された<sup>43)</sup>。ワインガブの東隣にあるカンベラ郡プレリウ (Prailiu, Kecamatan Kambera) でおもに撮影された。映画にはプレリウの「ママ・ラジャ (Mama Raja)」<sup>44)</sup> と呼ばれる女性など、住人が数多く出ている。これまで取り上げた4作品とはまったく違い、現在のスンバに取り組んだ映画である。久しぶりに東スンバに戻って来た、ジャカルタで映画監督になるための勉強をしているマルティンが主人公で、彼のスンバ人としての成長を描いた映画になっている。冒頭はスンバ語だけが使われる映画だったが、途中からインドネシア語がメインになっている。3年前に亡くなった父親が遺した箱はかならず息子が開けなくてはいけないと、プレリウの男性が夢に見たので、映画制作の実習に忙しい中、マルティンはスンバに帰ってきた。その箱には父親が撮影した16mmフィルムが入っていた。そのフィルムを現像するための薬品を探すためスンバ島をバイクで回る。その過程でホテルで働くアナという女性と出会い、彼女との関係がしだいに深まっていく。

この映画には現代のスンバ社会が直面している二つの問題が描かれている。リリ・リザ監督自身、福岡映画祭での質疑応答で「映画はその風土と生活を自然に映し出すものです。ですから、この映画で描かれているのは今現在のスンバです。それはジャカルタの生活とはまったく異なるものですが、それでも急速なグローバル化の中で、スンバ特有の文化や人々の生活も、次第にかすんではきています」<sup>45)</sup> と述べているように、現在の社会変化にも目を向けている。ワインガブのマックスFM (実在のFM局) に、ある女性が行方不明の娘を探すための情報提供を訴えに来た。母親は、自分たちがマラブだから結婚証明書がなく娘の出生証明書もないと必死に訴えていた。この場面の背景には、マラブは国家公認の宗教 (agama) として認められてなく、そのためマラブの信仰者 (つまりキリスト教などの宗教を信仰していない人) がさまざまな人権侵害を受けているという社会問題がある。これは東スンバ県で大きな問題になり、そのための対策がじっさいに講じられている [小池 2017]。もう一つはアナの夫の失踪問題である。夫はマレーシアに出稼ぎに行ったまま音信不通になり、最後は遺体がバリ島で発見されたという筋書きになっている。東ヌサ・トゥンガラ州の他の県と比べたら、東スンバ県からマレーシアのアブラヤシ農園に働きに行く移住労働者 (TKI=Tenaga Kerja Indonesia) の数はそれほど多くない。といっても、問題があることは確かだ。リリ・リザ監督が、このように現代のスンバ社会が抱える問題を映画のストーリーに取り入れている点は高く評価できるが、ただ掘り下げ方が浅く、すこし表層的な描き方に

42) <http://milesfilms.net/en/humba-dreams/> (最終確認2020/03/29)

43) 筆者は2019年9月17日に観た。

44) プレリウの慣習上の首長 (ラジャ) であった Tamu Umbu Njaka の末亡人である。

45) <http://www.focus-on-asia.com/interview/6750/> (最終確認2020/03/14)

なっているのは残念である。ただし、この映画にも家屋に安置されているマルティンの父親の遺体が登場するが、その描き方は『マルリナの明日』と比べたら、はるかに適切である。『フンバ・ドリーム』の観客数はごく限られていて、スンバ観光への影響は『電波が入りにくい』と比べたら、きわめて限定的である。

## 5 映画からネットへ、SNSへ

映画でスンバの美しい海岸や丘陵地帯を観た観客がそのままスンバに旅行に行くわけではない。映画とそのロケ地を紹介するインターネット上のさまざまな記事やブログなどを参考にして、初めて旅行の行き先として選択肢に入るのである。たとえば、グーグルを使って『電波が入りにくい』のインドネシア語原題と「ロケ地 (lokasi syuting)」で検索すると、数多くのサイトがヒットする(約129,000。ちなみに『黄金杖秘聞』では約5,600)。その一つ「東ヌサ・トゥンガラ州スンバで『電波が入りにくい』のロケ地となった5つの観光地。その美しさに魅了されて！」(5 Tempat Wisata di Sumba, NTT yang Jadi Lokasi Syuting Film Susah Sinyal. Siap-siap Terpesona dengan Keindahannya!)<sup>46)</sup>には、東スンバ県の5つの観光地が紹介されている。順番に紹介しよう。ワインガブの空港から少し内陸に入った所にある、まさに東スンバらしいテナウ丘陵 (Bukit Tenau) と、エレンとキアラが寛いでいた美しいプル・カンベラ海岸 (Pantai Puru Kambera)、エレンたちホテルの宿泊客が山道を歩いて苦勞してたどり着いたタンゲドゥ滝 (Air Terjun Tanggedu)、マングローブが生え、夕焼け時が美しいワラキリ海岸 (Pantai Walakiri)、最後は、「緑の草原のカーペット」<sup>47)</sup>が美しいワイリンディン丘陵 (Bukit Wairinding) である。ジャカルタから来た旅行者が主人公となっている『電波が入りにくい』は、まさに「観光を誘発する」ために最適な映画になっている。また、すでに紹介したように、アンディンなど有名人 (selebriti) がスンバに休暇に行けば、それに関連した記事がネット上に出ることになる。現代のインドネシアではガイドブックや雑誌のような活字媒体よりも、インターネットが旅行情報を集めるための重要なメディアになっていて、これは日本と同様のことである。さらに、walakiri (ワラキリ海岸) でグーグル検索すると、写真も含めて49,000件ものサイトがヒットする。このように検索を繰り返すことによって旅行の目的地をしだいに絞っていくことができる。

2019年11月の時点で、インドネシアのインスタグラム利用者数は6161万人に達し<sup>48)</sup>、これはインドネシアの総人口の4分の1近くが使っていることを意味する。一方、すでに述べたように、インドネシアで国内旅行は2006年から増加している。多くのインドネシア人が旅先

46) <https://blog.misteraladin.com/5-tempat-wisata-di-sumba-lokasi-syuting-film-susah-sinyal/> (最終確認2020/03/27)

47) このサイトには書かれていないが、雨季には一面緑が広がる草原が、乾季には赤茶けた大地に変わるのがスンバの景観である。

48) <https://kumparan.com/kumparantech/jumlah-pengguna-instagram-di-indonesia-capai-61-juta-1sVVLzdQ00T> (最終確認2020/03/29)

でスマートフォンを使って美しい風景を写真に撮り、また自撮りし、それらの写真をInstagramに投稿している。そして、それをInstagramで観た人が、気に入った写真に「いいね!」を付けるのは、もはや当たり前の行動になっている。たとえば#sunbaで検索すると、53.7万件の投稿が出てくる<sup>49)</sup>。目立つのは、テナウやワイリンディンなど丘陵で草原を背景にして撮った写真の投稿であるし、またワラキリ海岸の夕焼けを背景にしたマングロプの写真も多い。ちなみに#walakiriだと、投稿数は1.4万件になる。スンバで撮影した映画を観た人がスンバに旅することもあれば、映画は観なかったが、多様なサイトやInstagramにアップされている写真を観て、スンバに興味を持つ人も出てくる。映画だけではなく、人々がパソコンやスマートフォンでアクセスできるさまざまな情報が人々をスンバ島に誘っている。

## 6 おわりに

文化人類学の一領域である観光人類学では、ある地域を訪れる観光客が増えているという事実だけでなく、観光客（ゲスト）とそれを受け入れる現地の社会（ホスト）との関係を論じたり、また、観光客が増えることで、現地の文化と社会がどのように変わっていくか、さらに観光客のまなざしによって、どのような文化が「生成する」かを議論するのが常であった<sup>50)</sup>。そのような観光人類学の立場からみれば、本稿はやっとスンバにおける観光発展の概略だけで終わっていることになる。とはいえ、インドネシア映画の研究と、スンバという地域社会の研究を結び付けた点では、新しい試みと言えよう。2019年に書いた共同研究の報告書に続いて、映画というマスメディアだけでなく多様なサイトやSNSが観光に大きな影響を与えるようになったという、日本社会との同時代性を明確にしている。たとえば2019年に大ヒットしたアニメ映画『天気の子』の舞台の一つと目された神津島を訪れた人のブログ「天気の子 舞台探訪（聖地巡礼）～神津島～」<sup>51)</sup>があったり、「#天気の子聖地巡礼」というハッシュタグを付けて、神津島の動画が投稿されているのと、同様なことがインドネシアでも起きているのである。

スンバ観光の負の側面に触れて本稿を閉じたい。貧困が問題になっているスンバ社会で観光客の増加は、経済的にみれば発展に寄与することは確実である。しかし、環境破壊や現地住民の周辺化など、観光の悪影響も忘れてはいけない。インドネシアの歌手であり女優のウィディ・ムリア・スナルヤ（Widi Mulia Sunarya）のスンバ旅行について書いた記事がインターネット上にある<sup>52)</sup>。この記事でウィディは、ワラキリ海岸には、以前は大きなマングロプが生えていたが、今では小さな木しか残ってないと嘆いている。また、観光客のカッ

49) 2020年3月30日時点の数字である。もちろん、この数字はインドネシア人以外の投稿数も含む。

50) たとえば山下 [1999] は、インドネシア、とくにバリ島を対象にした観光人類学の成果である。

51) <http://astral01.hatenablog.com/entry/2019/07/29/215614>（最終確認2020/03/29）

52) <https://bisniswisata.co.id/widi-sedih-puluhan-pohon-bakau-kerdil-di-pantai-walakiri-sirna/>（最終確認2020/03/28）

ブルがマングローブの木に登ろうとしていて、彼女は「止めて」と叫んだという。観光客が少ない時は自然環境への影響は心配する必要がないが、多くの人が訪れるようになると、環境破壊が問題になることは、世界中のどの観光地でも現実に行き起きていることである。また、将来的により深刻な問題は海岸部の土地の買い占めである。ワインガブから西に向かうと、海岸沿いの土地がほとんど柵で囲われていて自由に入れなくなっていることがよく分かる。外部の人間が将来のホテル建設やリゾート開発を見越して、投資目的であらかじめ住民からただ同然の価格で土地を買い占めているのである。バリに本拠を置く不動産会社はスンバを「次のバリ」と呼び、観光地としての可能性の高さを強調し、スンバへの不動産投資で多額の利益が生じると語っている [Surewicz 2016]。当たり前の話であるが、現地住民にプラスに働く観光開発ならば、進めていく必要はあるが、現地社会とは関係なく外部の人間だけが甘い汁を吸うような開発は見直すべきである。

本稿で明らかにしたように映画を契機に観光客が増加したスンバを、今後は現地の住民の目からしっかりと注視していくことこそスンバで調査した人類学者の責務である。

#### 参考文献

- Badan Pusat Statistik, 2019, *Data dan Informasi Kemiskinan Kabupaten/kota Tahun 2019*, Jakarta: Badan Pusat Statistik.
- Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2007, *Indikator Ekonomi Sumba Timur 2006*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.
- Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2017, *Indikator Ekonomi Sumba Timur 2016*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.
- Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur, 2007, *Provinsi Nusa Tenggara Timur dalam Angka 2007*, Kupang: Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur.
- Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur, 2015, *Nusa Tenggara Timur dalam Angka 2015*, Kupang: Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur.
- Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur, 2019, *Provinsi Nusa Tenggara Timur dalam Angka 2019*, Kupang: Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur.
- Barudin et al., 2017, *Kajian Data Pasar Wisatawan Nusantara 2017*, Jakarta: Badan Pusat Statistik dan Kementerian Pariwisata.
- Beeton, S., 2016, *Film-Induced Tourism*, 2nd ed., Bristol: Channel View.
- Beta Septi Iryani & Kartika Yulistyawati, 2014, *Statistik Profil Wisatawan Nusantara 2014*, Jakarta: Pusat Data dan Informasi Kementerian Pariwisata.
- 古澤拓郎, 2017, 「インドネシア・スンバ島西部の在来暦法——『苦い月』と『ゴカイ月』をめぐる地域間シグナル伝達の分析から」『アジア・アフリカ地域研究』17-1: 1-38。
- Hoskins, J., 2002, Predatory Voyeurs: Tourists and “Tribal Violence” in Remote Indonesia, *American Ethnologist* 29-4: 797-828.
- Ika Natassa & Ernest Prakasa, 2018, *Susah Sinyal*, Jakarta: Gramedia Pustaka Utama.
- 小池誠, 1989, 「イェとムラ——インドネシア・東スンバ社会におけるイデオロギーと現実」『民族学研究』54-2: 137-165。
- , 1990, 「中核村ウンガの「大祭」をめぐる——1986年, インドネシア・東スンバ」『アジア・アフリカ言語文化研究』39: 135-161。

- , 1998, 『インドネシア——島々に織りこまれた歴史と文化』三修社。
- , 2005, 『東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼』晃洋書房。
- , 2012, 「インドネシア・スンバ島における世帯と家計の人類学的研究」『桃山学院大学総合研究所紀要』38-1: 27-48。
- , 2013a, 「インドネシア・スンバの父系社会における家族の多様性 家族圏再考」『比較家族史研究』27: 7-26。
- , 2013b 「インドネシア・東スンバ県パフンガ・ロドゥ郡の村落社会における世帯と経済」『桃山学院大学総合研究所紀要』39-1: 45-61。
- , 2016, 「『黄金杖秘聞』に描かれた風土——インドネシアにおける地方再発見の動き」山本博之・篠崎香織編著『たたかうヒロイン 混成アジア映画研究 2015』（CIAS Discussion Paper No. 60）京都大学地域研究統合情報センター。
- , 2017, 「インドネシア・東スンバ県における宗教と人権——マラブ信仰をめぐる動き」『インドネシアニュースレター』95: 32-38。
- , 2018, 「インドネシア映画にみられる『未開な地方』の商品化」福岡まどか・福岡正太編著, 『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート。
- , 2019, 「映画に描かれた現代のインドネシア社会——旅行・グルメ・SNS」『桃山学院大学総合研究所紀要』45-2: 69-87。
- Koike, Makoto, 2019, Indigenous and Local Knowledge Promoting SDGs in Indonesia: The Case of the Sumbanese Cultural Festival, *Journal of Environmental Science and Sustainable Development*, 2-2. Available at: <https://doi.org/10.7454/jessd.v2i2.1034>
- バンドラ編, 2019, 『マルリナの明日』バンドラ
- Surewicz, A., 2016, Markets rising in the East. Retrieved from <http://exotiqindonesia.com/markets-rising-in-the-east/> (最終確認2020/03/30)
- 鈴木晃志郎, 2009, 「メディア誘発型観光の研究動向と課題」『日本観光研究学会第24回全国大会論文集』85-88。
- 田口理恵, 2002, 『ものづくりの人類学——インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』風響社。
- 山本博之・篠崎香織編著, 2016, 『たたかうヒロイン 混成アジア映画研究2015』（CIAS Discussion Paper No. 60）京都大学地域研究統合情報センター。
- 山下晋司, 1999, 『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会。

(2020年3月31日受理)

## Increasing Tourists to Sumba Induced by Films and Instagram: The Development of Tourism in Eastern Indonesia

KOIKE Makoto

This paper is the second report on the research project titled “Interdisciplinary Study of Mutual Cultural Exchange between Japan and Indonesia (II),” which was funded by the Research Institute of St. Andrew’s University. Formerly, most people living in Jakarta and other big cities in Java were not familiar with the name of Sumba Island, located on the periphery of eastern Indonesia, one of the country’s most sparsely populated and impoverished regions. Since four Indonesian films shot on Sumba were released in the 2010s, however, the island has become popular as a tourist destination. Recent development of tourism is significant, as shown by statistics issued by local governments of East Nusa Tenggara Province and East Sumba Regency. The number of tourists visiting East Sumba increased annually from 2012 to 2017, with the increasing rate of domestic tourists more conspicuous than that of international tourists. This paper aims to explore how filmmakers based in Jakarta have represented the landscapes and cultures of Sumba and how these cinematic images attract tourists living in urban areas and influence the development of tourism on Sumba. The paper also discusses the importance of social media from which people acquire travel information. This study of tourism focuses on four Indonesian films. *Pendekar Tongkat Emas* (The Golden Cane Warrior) is a martial-arts film directed by Ifa Isfanyah and released in 2014. The producers, Mira Lesmana and Riri Riza, selected Sumba as the shooting location for a legendary story developing in an anonymous land. The second film, *Susah Sinyal* (Handphone is Difficult to be Connected), is a comedy directed by Ernest Prakasa. Sumba appears as a vacation spot for a busy lawyer and her daughter living in Jakarta. The third is *Marlina si Pembunuh dalam Empat Babak* (Marlina the Murderer in Four Acts), a 2017 drama directed by Mouly Surya. The fourth is *Humba Dreams*, a 2019 film directed by Riri Riza and produced by Mira Lesmana, which depicts the growth of a Sumbanese student coming back from Jakarta. Rugged and undulating savannah hills and valleys, which are totally different from Javanese landscapes, are highlighted in all the films. Especially, the film *Susah Sinyal* depicts unique and beautiful tourist destinations such as Walakiri Beach and Tanggedu Waterfall in East Sumba. In addition to films, social media that are prevalent among Indonesians are contributing to the increase in domestic tourists. Most people can obtain sightseeing infor-

mation easily by using smartphones. Visitors also often post photos they take at tourist destinations, as well as comments, on Instagram. These contents attract more tourists to Sumba as well.